

九州支部

右上葉切除術施行。

症例2：52才男性。左B³のa・b分岐部に発生した気管支内軟骨腫に対し左上葉切除術施行。

症例3：39才男性。左B⁶のa・b分岐部に発生した腺様嚢胞癌に対して下葉切除術施行。

24. 肺癌治療手術症例の検討

大分県立病院胸部外科

南 寛行, 内山貴堯, 高木雄二
河部英明, 永吉健介

同 中央検査部 辻 浩一
大分医科大学外科 葉玉哲生

昭和48年以降当科で経験した肺癌症例は300例で、切除例135例、切除率45%であった。このうち治癒切除を施行した64例につき、病期および組織型別に検討を加えた。

25. 75才以上高齢者肺癌手術例の術前臨床所見からみた術式の選択と術後合併症の検討

産業医科大学第2外科

永田真人, 小田桐重遠
徳永裕之, 川原英之, 村上 勝
石倉義弥, 吉松 博

当科入院の75才以上の肺癌15例中11例に切除術を施行。術前臨床病期はIa 5例, II 5例, III 1例で、組織型は扁平上皮癌3例, 腺癌4例, 大細胞癌3例, 小細胞癌1例であった。術式は二葉切除1例, 一葉切除6例, 区域または部分切除4例で、手術死は1例であった。

26. 気管支形成術及び分節肺動脈切除を施行した肺癌の3例

国立大分病院呼吸器科

宮崎泰弘, 桑原哲郎, 福島 純
甲斐隆義

65才男性、及び71才男性共に右上葉発生の扁平上皮癌に対し右上葉sleeve lobectomyを、左上葉発生扁平上皮癌の65才男性に対し分節肺動脈切除を施行し

た。扁平上皮癌に対するかかる術式は肺キノ一面での手術適応の拡大と同時に充分治癒を期待出来る術式と考える。

27. SUPS皮内テストからみた肺癌患者の術前免疫賦活と術後免疫能の変動

産業医科大学第2外科

村上 勝, 徳永裕之, 永田真人
小田桐重遠, 川原英之
石倉義弥, 吉松 博

肺癌患者に術前から免疫賦活剤を投与し、SUPS皮内反応の変動を追跡する事によりOK-432投与下ではSUPSが有用な免疫学的パラメーターとなりうる事、また術前の免疫賦活が十分に可能である事を示した。

28. 気管支動脈塞栓術の臨床経験; ECA, Absolute Ethanolを中心として

鹿児島大学放射線科

山口和志, 小林尚志, 内山典明
小野原信一, 小山隆夫
園田俊秀, 田之畑修朔
篠原慎治

我々は9症例(肺癌6例, 食道癌2例, 陳旧性結核1例)にECA(ethylcyanoacrylate), absolute ethanol, Gelfoamを併用した気管支動脈塞栓術を実施し、止血効果, 腫瘍縮小効果, 使用塞栓物質の比較検討を行ない、報告した。

29. 肺小細胞癌に対する制癌剤と放射線合併療法の検討

国立療養所大牟田病院

半井一郎, 松本卓郎, 石橋凡雄
篠田 厚

久留米大学放射線科 兼行由美
肺小細胞癌8例にカルボコンの大量投与(0.4mg/kg~0.2mg/kg)を行い放射線の併用療法を行なった。その結果CR5例, PR3例の結果を得、半年以内の死亡例がなかった。副作用は肺線維

症4例起し、1例が死亡した。骨髄抑制もみられたが全例回復している。他に重篤なものはみられず、今後症例を重ね検討していきたいと思う。

30. 強力合併化学療法を受けた肺小細胞癌の予後、ならびにその病期、転移部位との関連について

九州大学胸研呼吸器内科

栗田幸男, 二宮 清, 重松信昭
同 病理 田中健蔵

CTR, ADR, VCR, ACNUの多剤併用化学療法を受けた肺小細胞癌は22例で奏効率は50%、50%生存期間27週でstage IIIとIVで有意な差はみられなかった。有効群と無効群では明らかな生存期間の差がみられた。肝や脳転移のある例でも有効例では生存期間延長がみられた。

31. 肺未分化癌に対するCOMP療法

長崎大学第2内科

神田哲郎, 岡三喜男, 植田保子
河野謙治, 船津 龍, 小森宗敬
斉藤 厚, 原 耕平

肺未分化癌22例にCOMP療法を行ない、小細胞癌14例では50%生存期間39週でCR 2例, PR 7例, 有効率64.3%であった。Limited diseaseの50%生存期間は68週, extensive diseaseでは33週, また有効例9例の50%生存期間は58週であった。大細胞癌8例の50%生存期間は30週でNC 8例であった。

32. 肺腺癌に対するCAP療法の検討

九州がんセンター呼吸器部

野下貞寿, 石松豊洋, 宮崎一博
一瀬幸人, 田中康一, 原 信之
大田満夫

手術不能肺腺癌11例(I期1例, III期2例, IV期8例)に対し、CPA400mg/m², ADR30mg